

「百姓漁師」という生き方

漁村類型としての「半農半漁」批判

The Way of Life Named Farming-Fisherman :
“A Farming and Fishing Village” Criticism as the Fishing Village Type

安室 知

YASUMURO Satoru

はじめに

- ①海付きの村という視点
- ②百姓漁師の農
- ③百姓漁師の漁
- ④百姓漁師という生き方
- ⑤百姓漁師という自覚

【論文要旨】

本稿では、従来「漁村」とされてきた海付きの村に注目し、近現代における基本的な生業構造とその変遷、そして生業選択の背景にある人びとの意識について考察することを目的とする。海付きの村という発想は、たんに立地として海に面していることだけを意味しない。また、発展段階的に漁村（漁業）に特化する前段階としての村だけを指すものでもない。当然、本稿は「半農半漁」といった研究者が作り上げた漁村類型の実態を検証しなおすことにもなる。

まず、本稿の主なフィールドとした三浦半島の海付きの村においては、住民による「百姓漁師」という自己認識があることに注目し、それについて考察した。その結果、百姓漁師は、以下の条件を備えたものであることがわかった。

1. 耕作面積 10 アール以下という土地所有上の最多層に属すること
2. 牛馬を所有しないこと
3. 水田を所有しないこと
4. 農による生産物のほとんどは自家消費されること
5. 自家で消費する魚介類のほとんどは自ら漁獲したものであること
6. 「商売」と称する金銭収入のほとんどが漁に依存すること
7. 「海の組合」の正規組合員であること
8. 「百姓漁師」と自称すること、また村内他者にもそう認められること

以上のように、近現代における海付きの村は、漁業だけで生活が成り立っているのではなく、農や行商、工場勤務など多様な生業を組み合わせることで生計維持活動としていること、またそうした多様な生業の組み合わせは、決して「半農半漁」というような概念で一括りできるものではなく、男女や老若の役割分担を基本に家族構成や市場のニーズを反映して時代ごと家ごとに個性的かつ可変的であることを明らかにする。

【キーワード】 百姓漁師、海付きの村、生業複合、半農半漁、民俗学